
ザ・ライアー

蠱毒成長中

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ザ・라이어

【Nコード】

N6933H

【作者名】

蠱毒成長中

【あらすじ】

北海道のリゾートホテル「ルスツリゾート」の屋内プールにて、壁や椅子が次々と人間を襲うという事態が発生。サウスウイングで一人のんびりとDVDを見ていた理系女子大生、楠木雅子は突然停電に襲われる。そして彼女が見たのは、宿泊者や従業員の死体が散乱する、生き地獄と化したルスツリゾートだった。道中であった男から、この事件を起こした存在が、進みすぎた現代科学の産み出した悪魔である事を知った雅子は、その撃破に乗り出す。「夏のホラー2009!!!」怖い話は好きですか？」参加作品の筈が、実に

ややこしい狂った物語の第二作。ジャンルは一応「モンスターアクションホラーバイオレンス」のつもりですが、ホラーがかなり薄れてます。

生きるとはつまり、

戦いである。

争いである。

競い合いである。

殺し合いである。

故に、何とも戦わずして生き残る方法など存在しない。

人の真理とはつまり、

科学である。

現実である。

神仏である。

思想である。

故に、信奉者達は己を絶対の正義と考え疑わない。

嘘や捏造は全てを破壊し尽くす可能性がある。

単純に学力の無い者が何かを偽る事は即ち、死や破滅の暗示である。平等に清く正しく報じる筈の者達は、私欲の為だけに読者を簡単に騙す。

嘘は危険である。

嘘は何にも勝る毒である。
嘘を制する者は、肉に溺れて溺死する。

嘘には気を付けよ。

嘘で、簡単に人間は死ぬ。

北海道・ルスツリゾートの一室
高級リゾートホテルの一室に、一人の女が居た。

「いやあ楽しかった。
出来れば来年も来よう。飛行機代馬鹿なんないけど」

そう言いながら何やら模造紙の束を整理している女の名は、楠木雅子。

岡山県某大学の動物学科に所属し、脊椎動物の進化についての研究を進めながら、その一方で生物以外に化学や物理にも精通する才色兼備の女子大生である。

彼女は大学の夏休みを利用して、北海道で開かれた夏の科学イベントに参加していた。

エクジソン投与によるハエトリグモの巨大化実験や、化学の力や食品添加物を活用した美味しい料理の作り方、自作ヤスリ刃物と市販の包丁で様々な食材を調理した時のレポート等の発表を済ませ、実行委員会から高評価を頂いたのであった。

「さて…と、そろそろご飯だねーっ」と

一通り整理も終え、ずり落ちた眼鏡を直した雅子は空腹感を覚え、巨大食堂「アラスカ」へと向かった。

部屋の扉を閉じると、アラスカへの廊下を足取り軽く進む。

途中窓から見える屋内プールに目をやると、中では数人の男女や家族連れが自由に楽しんでいた。

この時彼女はまだ知らなかった。

この楽園のようなホテルに、神の許しの元人類に手を貸す科学という名の悪魔が作り出した、ファンタジー絵空事のような力を持った凶悪な使い魔ファミリアが、侵入していた事に。

ルスツリゾートは今夜、ファミリア使い魔に豪勢な夕餉ディナーを振る舞うことになるという、その事実を。

他のイベント参加者達と共にルスツの美味しい飯をバイキング形式で頬張る楠木雅子は、知らなかった。

自分の運命を。

自分が使い魔ファミリアと戦う為の、唯一の希望であることに。

01:43 (後書き)

次回から無茶苦茶長くなります。

02・32(前書き)

何つたって長すぎるもんは長すぎる。

18:22・ルスツリゾート屋内プール

監視員に見張られながら、その場の十三人はプールでの時間を堪能していた。

その中に、一組のカップルが居た。どちらも適度な美形で、互いに理解し合う良いカップルである。

プール内をゆつくり足並みをそろえて歩きながら談笑する二人の内、女の方が口を開く。

「俊之、今日は本当に有り難う。」

二人の為にこんな素敵なりゾートで予約を取ってくれるなんて、男の方がそれに返す。

「構わんよ、百合。お前は血縁でなく、俺を初めて愛してくれた女だ。」

それに今まで何度もお前の世話になっているから、これくらいの事はしなければ俺の存在価値なんて無いに等しいだろ?」

すると女の方は、男の左腕に抱きつきながらこう言った。

「そんな事無いわ。何でそうなるのよ?」

それだけで貴方の存在価値が失われるなんてまず有り得ないってヴァ!

私だって相当迷惑かけて来たんだし、恩返ししたいのは私の方だつて」

「そうか?」

「そうよ!」

あっはっはっはと笑う二人。

そして俊之は右腕に違和感を感じ一瞬目をやるが、特に変わったこ

て、水着姿の利用者達は一目散に陸まで泳ぎ去ろうとする。

百合は身体の左半分を綺麗に削られており、悲鳴も上げず息絶えていた。

投げ捨てられた事でプールの水は血色に染まり、百合の胸を覆い隠していた黒ビキニは波に攫われ、彼女の整ったふくよかな乳房が露わになるが、そこに艶やかさやいやらしさというものは一切感じられなかった。

否、死体に欲情するような奴でもなければそんなもの、感じられるわけがない。

高い椅子に座っていた監視員も慌てて逃げようとするが、突如真後ろの壁が目鼻のない巨大な口に変化し、監視員の上半身を一瞬で食い千切る。

続いて襲われたのは真つ先に逃げ出した俊之で、ミミズのような形に変化した手摺りに絡め取られ、それが体内に侵入。一瞬で俊之の中身を喰い荒らす。

続いて赤子、その母親、その夫と、人々は壁や床に次々と喰われ続け、謎の口や触手は、半分残った百合の身体も平らげると、姿を消した。

唯一生き残った異変を察知した水中眼鏡の少年は、恐怖の余り着替えることも忘れてロッカーの中に隠れ続けた。

肉片一つ、血痕一つ無いプールは、ただただ人為的に作られた波が

行き来をするばかりであった。

食事の帰り、誰も居ない静まりかえったプールは多くの客の目に入ったが、それを異変だと感じる物は一切居なかった。そう、雅子も含めて。

20:00頃・雅子

何もすることが無い雅子は、只呆然と最新式のテレビに、持参したDVDレコーダーを繋ぎ、大好きなアニメのOVAを見ていた。今は丁度序盤、乳自慢（と、雅子は思っている）のヒロイン陣が屋外に設置された露天風呂に集う劇中随一の色シーンであった。しかも厳密に指し示すなら、大事に育てられている捨て子が洗われている最中に、のぼせてぶっ倒れていた仲間の一人が捨て子を抱かせて貰っているというシーンである。

「いやーまさに平成乳祭り…とは言わなくても、流石OVA。やりすぎでもなく控えめでもなく、適度なフリーダムって奴ね。声優の演技も輝いてるし、最高の出来だわッ！（つてか作者も今動画サイトでこれ再生しながらこの原稿書いてるのよね…）」

暫くスナック菓子を頬張りながらOVAを見ていた雅子。

本編は遂にクライマックスへと突入していた。捨て子への愛故に逃亡を試みる女（Uと仮定）を諭すため、親友として正義の心と愛用する剣を振りかざすUの親友（Kと仮定）との白熱した戦闘シーン。

捨て子を抱えたままのU目掛けて、Kの剣が振り下ろされるその瞬間！

雅子は柄にもなく大口でスナック菓子を頬張って、北海道限定のキリンガラナを思いつ切り飲むと、画面を食い入るよう見つめる。

と、その時であった。

ブチッ！

「！！！？？」

ブレーカーでも落ちたのか、突如部屋への電力供給が絶たれ、部屋を照らす光はその夜の満月だけになってしまった。

OVAも当然中断である。

「っああああああああっ！！」

久々に見た名作があああああああっ！！」

絶叫する雅子。

「確かこの後、暴走する親友に向かって、

『お前の何処がその子の母親と呼べる！？

何も知らぬ無垢な赤子を持ち去るお前の行いは、人攫い同然だ！』

とかそんな名台詞が飛び出し…たよね…戦闘前に

で、この後の展開どうだっけ…」

と、頭を抱え込む雅子。

「とりあえず外に出なきゃ！ スタッフさんと合流できたらしよう」

雅子は瞬時に荷物をまとめ上げ、とりあえず懐中電灯と部屋の鍵と財布と携帯電話だけを持ち出そうと廊下に繰り出す。

ガチャ

ドドドドドドドドドドドド！

「うおおお俺が先だああああ！」

「アタシが先よおお！」

「年寄りを大切にせえ〜」

「子供を思いやれ〜」

ボタン

混乱した大勢の客の波を恐れ、急いで部屋へと退避する。

「やばいやばい。」

あんなのに巻き添え喰らったら只じゃ済まされないよ……」

雅子は混乱が収まるまで、暫く部屋で待機することにした。
当然部屋の鍵は閉めてある。

と、次の瞬間。

GYAAAAA
AAAAAAAAAAAAAAAAA……

HUGYAAAAA
AAAAAAAAAAAAAAAAA……

A A A A A A A A A A A A H

恐らくは人間のものであろう、絶叫や悲鳴が四方八方から聞こえてくる。

「（…何？外部で一体何が起こってるの…？）」

暗闇の中、雅子は悲鳴が止み、混乱が収まるのを待ち続けた。そして待つこと10分後。

漸く喧騒が収まったので、雅子は最低限の持ち物だけを持って部屋の外に出る。

そしてそこで彼女が見た光景とは

「……………ッ……………何……………これ……………」

本来穏やかなクリーム色をした壁は血糊で深紅に染まり、

腹を裂かれ内蔵を食い荒らされた男は天井に磔にされ、

女の上半身は壁から生えているかの如く埋め込まれ、

少女は縦半分に引き裂かれ、

少年は横半分に引き千切られ、

老人の頭が足下に転がっている。

そう。それはまさに地獄という表現に相応しい光景。

雅子は吐き気こそ催さなかった物の、その光景を見て背筋が凍り付いた。

しかし、すぐさま我に返った雅子は、ホテル内の探索を続けることにした。

「この死体の数と有様から考えて、この人達を殺したのは…何？」
「この惨劇の元凶は何か」という疑問はどれほど考えても消えなかった。

そして雅子はそのまま探索を続けながら、死体のポケットを漁っては使えそうな物を採取し続けた。

「…さて、と。」

確実に死者冒読だけど、脱出の為には悪事も羅生門理論でチャラって事にしておこう。

で…この階の死体は全部調べ終わったね。

よし、降りよう」

そう言つて雅子は階段へと歩き出そうとした。

次の瞬間。

「待つてくれ、お嬢さんッ」 ガシッ！

何者かに呼び止められると同時に右足首を掴まれる雅子。

「な、何ッ!？」

声のする方を懐中電灯で照らすと、肩幅の広い中年の男が、雅子の右足首を掴んでいた。

懐中電灯で照らすと、男の下半身は既に失われていた。

気味悪がつて逃げようとする雅子に対し、男は言った。

「待つてくれ!どうか逃げないで私の話を聞いてくれないか？

大丈夫だ。悪いようには決してしない！」

男の真剣な眼差しに説得された雅子は、ひとまず廊下に座り込んで話を聞く事にした。

「私は安藤陽一。

シンバラ社緊急特務科の者だ」

そういつて陽一は雅子に名刺を差し出す。

「あ…有り難く受け取らせて貰います。私は、楠木雅子。

岡山の大学で動物学の研究をしています。どうぞ宜しく」

雅子は名刺を受け取り、陽一に軽く挨拶をした。

陽一はそれに軽く頷くと、ルスツを襲った事件の真相と、自分が何故此処に居るのかを話し始めた。

中年説明中

「そんな事が…」

「信じて貰えない事は百も承知だ。」

だがしかし、君がどう思おうとこの事は事実以外の何者でもない」

「信じないだなんて、そんな馬鹿な事が有るとでも？」

死体の傷口、所要時間、死体の状態…どれをとっても、こんな事は人間には出来ません。

つまり信じるほか無いという事ですよな？」

陽一が雅子に話した内容とは、こういったものであった。

・彼はシンバラ社の中でも滅多に活動をする事のない部署「緊急特務科」に所属し、会社絡みで恐ろしい事態に発展した場合それを解決する為に動くのが仕事。

・ルスツを襲ったのは、シンバラ社が人為的に作り出していた実験生物こと通称「라이어」である。

・라이어は元々、オホーツクの無人島に建てられたシンバラ社の研究施設で育てられていた。

・世界最高峰のセキュリティシステムによって厳重に管理され脱出は不可能だったが、ある時突如として施設の機材全てを破壊し、本土へと逃亡。

・後に施設を調査した所、頭のない成人男性の死体が見付かった。死体は何とあの国際指名手配中の怪盗「アルセーヌ・コガラシ」のものである事が判明。

・更にシンバラ社に設置されているPCのメール履歴を見ると、会社に属する全てのメールアドレス宛てにアルセーヌ・コガラシの犯行予告メールが届いていた。

・この事から推理すると、恐らくアルセーヌは己のターゲットとして、よりによって라이어を選んだのであろう。

セキュリティを破るのはアルセーヌにとって朝飯前だったが、彼にとって라이어は未知の存在だった。

라이어を只の青い心臓だと思いこんだアルセーヌはそれを素手で

盗み出そうとするが、ライアーは突如アルサーヌの顔に飛びかかり、彼を殺してしまう。

そしてライアーは施設を抜け出し、空腹感を覚えルスツリゾートへ侵入。己の本能が俥に食事を開始した（推測）。

・ライアーは喰うため以外にも、楽しむ為など高度かつ低俗な目的の為に殺人を行う非道な存在である。

「ライアーが何者なのか…それは私の部屋に保管されているマニュアルに書いてある…」

鍵だ…受け取ってくれ…」

既に命が尽きかけている陽一から鍵を受け取る雅子。

「さあ…」

…私に…

…構わず…行…け…ライアーは…

…人…間の…油断…に…漬け込…

…ん…でく…る…」

陽一はその言葉を最後に、この世での生を全うした。

無言の雅子は涙も流さず、鍵を握り締めてその場を走り去った。

3042号室内

雅子は淡々とマニュアルに目を通していた。

『…ライアープロジェクト。特秘名狼少年の心臓…』
ウルフボーイズ・ハート

こんなものが…日本で…」。

『計画概要…本計画の概要は「進化の限界速度を極めた生命体の創造」である』

進化の…限界速度？

んでー何々…

『「個体詳細」…

当個体はライアー 嘘吐きという名前の通り、全身の細胞が周囲全てに嘘を付く…つまり究極の変身能力を持つ生命体である…。

その変身対象は生物に限らず、無生物も可能である。

複雑な構造を持つ機械類への変身も可能だが、その機械として機能することは出来ない。

その姿は変幻自在であり、分裂すれば小さな物体に、膨張すれば巨大な物体にも化ける事が出来る』

うわぁ…じゃあ遊園地付きのリゾートホテルとか王国じゃん…。

『但し分裂は必ず複数に分かれなければならず、分裂したそれらの質量は同じでなくてはならない。

また体積1.5倍以上の大幅な膨張を行った場合、変身対象の物体の質量と感触を両立させる事は不可能となる。

また体積の40%程で有れば単一での縮小や、質量・感触を両立させた膨張が可能となる。

プラナリアを上回る再生能力を有し、物理攻撃を受けてもすぐさま身体を再構築する事が可能だが、それは身体の修復であり傷を癒すことではない。

傷を癒すためには膨大な量の栄養素が必要となるが、研究所では適当な餌を与えて育てていたため残念ながらどれほどの量で傷の治療が出来るかは不明。

更に寿命も極端に短く、残念ながら生命科学における永遠の課題「不老不死」が実現できたわけではない』

そりゃね。

つて事は、危険は大きいけど寿命でくたばるのを待つってな最終手段もあるわけだ。

まあ、そうは言っても寿命でくたばるまで何年も閉じこめていられる場所が必要だろうけど。

『変身可能な物体は個体と半個体に限られ、自身を液化させる事は出来ても液体・気体への変身は不可能。粒子にも変身可能だがその大きさは炭素原子を下回らない。

また火・酸・塩基・酵素系毒素には極端に弱い』

ガソリンで焼けっつての？

そりゃまあ、リゾートホテルにニトログリセリンやTNTが有るわけ無いし、ましてやオクタニトロキュバンなんて夢の又夢なものねー。

『致死或いはそれに満たなくとも一定以上負傷させると強制的に変身が解除されてしまう。』

研究段階での初期状態の姿は直径50cm程で4本の血管に似た触手を持つ青い心臓の姿をしているが、脱出段階で怪盗アルサーヌ・コガラシを殺害し初期状態の姿として認識することに成功した模様である』

アルサーヌ・コガラシ死んだって聞いたけど…こんな真相だったのね…。

『また心臓形態のみ寄生能力を有し、動物の脳を支配することで生きていくかのように操ることが出来る』…って怖っ！ライター怖ッ！

『身体の一部が切り離されると、それを再び吸収しなくては元の質量に戻るものが無く、その分質量と体積を小さくしなくては為らなくなる。』

これは一見長所に見えるかもしれないが、歴とした短所である。

何故なら質量と体積が小さいと言うことは、それだけ体内に保有するエネルギーの量が少ないと言うことと同義である。

保有エネルギー量が少ないほど、擬態の持続時間は低下していくため、見破られる確率が格段に上がる。

また身体の再構築速度も低下、傷を癒す為に必要な栄養分も大量に取らなくては為らない』

……よし。

とりあえず武器と安全の確保だね。あと居るかどうかわかんないけど生存者も出来れば探したいところ……」

女子大生、楠木雅子。

今の彼女は、地獄に咲く花卉にルシフェリンを有した一輪のカロライナジャスミンであり、暗黒の深海で光り輝く透き通る身体のクラゲとも言い表せる。

つまり、暗い中でも自分なりに光って明るくなろうと努力しているのだ。

彼女の戦いは、まだまだこれからだ。

深夜のホテル内部・雅子、ライアー

ふとした事からライアーに見付かってしまった雅子は、眼前で暴れ回る変幻自在の生命体をどうやって足止めしようか、考えながら必死で逃げ回っていた。

「ぬおつとお！早っ！スライム早っ…って思ってたら次は人間大の猫かい！

しかもスフィンクス！？

小さいから可愛いけど、でかくなると最早気持ち悪いわ！」

「NNMYAAAAAAAAAAAAAAAAA!!!」

ダッ！

毛のない猫 スフィンクスに化けたライアーは、雅子のその言葉に腹を立てたのか、それとも全く別の理由か、雅子目掛けて飛びかかる。

「ひいいい！こっち来たア！」

全速力で逃げる雅子。盛大に壁へと激突するライアー。

ズドオアン！！

大理石の壁にぶつかり、猫の頭が碎ける。

一応ダメージは喰らったようだ。

シユオオオオオオオオオ…

ライアーの頭部が次第に元に戻っていく。

それはまるでバラバラになった変形菌が集まって再び巨大化するかのようだった。

「…流石。どうりであのシンバラが怖がって外に出したからないわけだ。」

まあ良いか。

ここで止めておかないと、此奴が寿命で死ぬ前に日本人は全滅するわけだし、そうじゃなくても陽一さんの命だつて無駄には出来な
いからねーっ」と…」

雅子はヤスリで作ったロングナイフを手に取り、それを構えて言い放った。

「さあ来なよ、嘔吐き君。」

私はどうなつても良いんだよ、例えアンタに殺されてもね…。
ただ、私はアンタをここから逃がすつもりなんて、一切合切無いか
らさあ…」

そこで暫く黙り込み、深呼吸をしてから、巨大不毛猫種スフィンクスに化けたライアーを睨み付けながら、凄んで言い放つ。

「宜しく!」

対するライアーもまた、雅子が一筋縄では行かない相手である事を悟った。

ライアーは己の持つ人為的に植え込まれた人間と同等の知能で考えた。

「(この女…: 只単に俺への恐怖を揉み消すために凄んでいるのか…?)」

否、違う。

そうであれば体制は屁放り腰、四肢は独特の動きで震えているはずだ…。

ではこの女…何も考えないとしても無い馬鹿なのか…？

否、違う。

そうであればもっと頭髪は派手な色合いで、服もまた如何にも金の掛かりそうな物を着ているはずだ…。

では何だ…この女は…？」

ライアーは二十秒に及ぶ熟考の末、結論を弾き出した。

「（そうか…この女は…。

気高き覚悟の元に、

現在における己の正義や己の役割というものを見出し、

それを全うするために愚かながらも熱く燃え上がるような素晴らしき自己犠牲の精神を持った…

戦士か…！

見たところ戦に向いた身体とは思えないが、この私を殺し尽くすという自身が、その為の秘策が有るのだろう…。

ははは…何と面白いことか…。

空きっ腹を満たすためにここへ寄った予定が、こんな所で生涯初の戦いを経験することになるうとは…！

面白い…面白いぞ…人間…我々を作り出した…我々の生みの親の…その者達の…誇り高き眷属よ！」

ここでライアーは初めて口を開く。

「ならば！」

ならば良からう！

私はライアーとして、一生命として、一物体として、お前を殺し、見事全生物の頂点と為って見せよう！」

「（口を…開いた…？）」

「但し人間よ…お前は私に喧嘩を売ったのだぞ…？
この嘘吐きに…。」

私はこういう時こそ正直だが…まともな戦いを出来ると思つなよ
！」

ギョオウ！

バシヤ！

バシヤン！

バシヤアアア！

ライターは自身の身体を液化化させ、染み込むようにして逃げた。

それを見ていた雅子はというと、

「お安い御用！ってか全力で相手させて頂きますからア…。
んで名乗り遅れたけど、アタシは楠木雅子。

東 P e t、H L S G、う わ る も なんかのス
タンダードなノーマルカツプリングが大好物の動物学科に通ってて
同人活動もやってる、花は花でもトリカブトとかトウゴマとかカロ
ライナジャスミン的な感触の大学2年生。

キャンパスの蝶ってよりも研究室のコウモリガ。

ついでに言うつと週刊ゲーマー通信でモ 八 関係の記事書いてて、
更には漫画原作もやってる中堅売れっ子変人記者こと手塚松葉の後
輩でもあるわよーん。

よーろしくねーつと」

そんな感じに自己紹介を済ませた。

同時刻・プール更衣室・とある少年

恐怖の出来事から命辛々逃れることの出来た少年は、ひとまず水着
から私服に着替えていた。

「…何なんだよ…アレは…。

あんなの見たこと無いぞ…どこの本にもあんなものの情報は無かつ
た…。

いったい何なんだよ…死んだ皆は「アレ」に喰われたんだろうけど、
だとしてもアレの正体は何なんだ…？

地球外生命体？

馬鹿馬鹿しい！SFじゃあるまいし！

いやでもエウロパの存在を考えれば否定は出来ないな…。

妖怪？

もつと馬鹿らしい！ファンタジーじゃあるまいし！

いやでも昭和40年までは警察に妖怪科があったと聞くよな…。

…

じゃあ…アレは一体何なんだ…？」

着替え終わった少年は暫く考え、最も妥当な結論を出した。

「他の生存者を捜して、一緒に脱出しよう！

あんな化け物と一緒に寝泊まりするなんて、絶対にご免だ！

又　ギのパシリの方がまだマ…いや、同じくらいか…」

さて、

読者諸君はお気づきであろうがこの少年、実は物語において非常に重要なポジションにあるかもしれない人物なのだ。

そう、第1話。

俊之がライアーに腕を喰われた瞬間を目撃したのが　つまりこのホテルで最初にライアーを見付けた人物こそ　彼だった。

決意を固めた少年は、ひとまず部屋に戻り荷物をあらかじめ纏め上げ、自分以外の生存者を探す為に廊下へと繰り出した。

同時刻・一階売店前・雅子

雅子は売店の前にいた。

「…とりあえず腹お腹空いたわ…スナック菓子でも取って食べよう。沢山取っておけば生存者が居たときに分けて上げられるし。」

後々窃盗とか言われても、うまくズラければ大丈夫。ってか仕方ない。仕方ない。」

そう言うと雅子は売店の商品棚に手を伸ばし、スナック菓子や土産物の食べ物を中心に次々と手にとっていく。

あらかた取り尽くした所で、収穫の一つである袋入りスナック菓子の袋を開け、一撮みほど掴んで食べ始めた。

ガサ…バリバリッ…ザクッ

ゴシユ

ゴシユ

ゴシユ

ゴシユ

ゴシユ

ゴシユ…

「…んむ…みやつまりもっしい…」

(訳：んー…やっぱり美味しい…)

ゆっくり噛み砕いたスナック菓子を飲み込んで、指までしゃぶっている雅子の態度は、まさに余裕綽々といった風である。

そしてその隙を、ライターが見逃す筈事など、当然有り得ないわけだ。

現にライターは、売店付近にある洋楽合唱とジャズミュージック演奏と英語のコントを繰り広げるヌイグルミに化け、チャンスを伺っていた。

「（…さあ…くつろげ、楠木雅子…！
私は何処にも見えないぞ！」
と、こんな事を思っているに違いない（推測かよ

さて、一方雅子はというと、当然ライアーの存在になど気付いていないように見える。

ライアーが化けた人形のある台座を見るための設置された椅子に、雅子はのんびり座り込む。

そしてポケットから何かを取り出そうとしている。

ライアーはこれを願ってもないチャンスだと思い、雅子目掛けて一気に擬態を解いて襲い掛からんとする。

しかしその瞬間、雅子は両手になにやら半透明で筒状の物体を持っていた。

というか筒状の物体を、

構えていた。

そして鋭い爪を持った身軽な怪物に化けたライアーが、そのかぎ爪を雅子に振り下ろそうという瞬間。

ポオン！

軽い破裂音と共に、筒の先端から小さなオレンジの球体が勢いよく発射された。

球体はライアーの頭部に直撃後、頭の中央までめり込み、頭の内側から大爆発を起こし、ライアーを後ろへと吹き飛ばした。

雅子は吹き飛んだまま動かないライアーに、淡々と言い放つ。

「300円エアガン。」

ホームセンターなんか売ってる注射器に、切ったボールペンを繋げて空気圧でBB弾を発射する、低価格ながら強力な発射装置。とはいっても、今回仕込んだのは特別仕様で中に火薬と燃料が入ってたけどね。

中身をどうやって爆発させたかは、お察し下さいと……」

雅子は更に、何やら小さな金属製のボトルの蓋を開け、白煙を発する中身を動かぬライアーにかけた。

カチィ…キョロロロロロロロロ……ッ

ライアーの身体はみるみるうちに凍結していく。

「液体窒素。」

暫く眠っておくんなまし。

アンタの弱点が火なのは判ったけど、火種も燃料も無いから焼けな

いんだよね」

凍り付いて動かないライターを尻目に歩き出す雅子。

「さーて燃料燃料〜っと」

どうやら火種と燃料を探しに行くらしい。

雅子は小走りでその場を後にした。

目の前に倒れているライターを、全…凍…ら…せ…た…と…思…い…こ…ん…で…

同時刻・ホテル内部・少年

「畜生…何て有様だ…」

こんな事が…こんな馬鹿なことが現実なのか…？」

少年は、独り言を呟きながら、血肉によって赤黒く染まり、生のまま常温に放置された臓物の放つ強烈な腐臭の漂う、惨殺死体や血染めの白骨が散乱したホテルの中を、自らの足でただただ歩み続けた。

生存者を捜して。

だがしかし、現実とは厳しい。

前後左右を見渡せど、広いホテルを探せども、生存者など居なかった。

それどころか、部屋で休んでいた筈の自分の両親までも、無惨な死体で見付かっていた。

その悲しみは少年の心に、とてもとても大きく深く痛々しい穴のよ
うな傷を残酷にも空けたのだ。

少年の独り言はまだまだ続く。

「だとしたら……僕が今まで見てきた世界は…僕たちが今まで見て
きた世界は…只の下らない幻想だということのか!？」

巫山戯るな!

誰がそんな世迷い言を信じるか!

こんな生き地獄のような 否、生き地獄そのものの世界を、誰が現
実だなどと潔くと認めるものか!

誰も認めまい!決して誰も認めまい!

例え世界がこの生き地獄を現実として受け入れても、僕は絶対にこ
んなものが現実だなんて受け入れない!

例え何を裏切つてでも、例えこれが現実であり、今までの平安は全
くの幻想であつたとしても決して、決してこれを現実とは思わない!
罵られても、罰を受けても、僕は…幻想に走る!平和という名の幻
想に!」

眼前で友を喰い殺され、両親の無惨な死体を見せつけられた少年の
怒りは、既に恐怖を吹き飛ばすほどのものであった。

少年は元々比較的温厚な性格であつたから、誰かを本気で殺したい
ほど憎んだり、如何なる犠牲のもとであるうとも、相手を燃え盛り
煮え滾る地獄の釜ケナの底の更に底まで突き落としてやるうという程の
猛烈な殺意を誰かに覚えたりという事は、生後15年の人生の中で
一度もなかつた。

だが、

少年は、

今この時、

悪霊レギオンの群れも逃げ出す深く恐ろしい憎悪を、

近代アドルフの悪魔も退却する果てなど無い悪意を、

悪魔サタンの皇帝も遠慮する全てを滅ぼす殺意を、

そして如何なる癒しによっても癒すことの出来ない悪夢のような苦

痛を、

人類を救う仏の王に付き従う者にも、
人にも救えぬ地獄のような邪悪を、
絶対的な愛の神の忠実な代理

つまりは

悪を

その身体に、宿していた。

その精神ココロに、宿とどしていた。

憎悪

悪意

殺意

苦痛

邪悪

それらは皆、刃のように鋭く真っ直ぐで、羅針盤の針のように正気なら常に同じ方向を向く。

そしてそれらの矛先は、ただ一つの方位しか決して指し示さない。

人工ルックリソートの楽園にて散々暴れ回り、
楽園を惨劇の如く有様に仕立て上げ、

その場の罪無き数多の命を殺し尽くし、
身勝手に傍若無人な暴虐の限りを尽くし、
今この時も何処かに潜み続け、笑いながらのうのうと生きている、
人ならざるもの、
生まれ得ざるもの、
史上最悪の悪意ある生命、

人間の作り出した夢魔

ライアーのある方位しか。

ライアーを殺す為の方位しか。

指し示さない。

少年の右手には、

死体からか、売店でくすねたのだろう。

使い捨てのライターが握られていた

そして少年の左手には、

何処から手に入れたのか。

巨大なポリタンクに、何やら黄金色で少し粘りのある液体が入っていた。

自動車用の、ガソリンである。

少年は今、非常にシンプルな決断をした。

「僕自身が火達磨となって、
不死鳥の如き怒りの炎を身に纏って、
己もろとも、このホテルもろとも焼き尽くしてやる。」

この忌まわしき、事件の元凶を…」

そしてまた、ライアーもまた動き始める。

人形に化けた際、余ったので適当な壁に隠していた、自らの半身をどろりと溶け出たその半身は、ひとまず膜となって凍った半身に覆い被さり、全身を振動させて瞬時に半身を凍結から解放した。

無事一つに戻り、真の姿である青い巨大心臓の姿をとったライアーは、これから先をどうしようかと考え始めた。

と、その時である。

何処から都もなく怒鳴り声がある。館内に響き渡るほどの大声で、子供一人吹き飛ばす程の波動が出ているかの如く馬鹿でかい声だった。

身体の一部に蝙蝠の耳を形作ったライアーにとって、その怒鳴り声を鮮明に聞くことなどは、当然容易い。

そして聞いてみると、その怒鳴り声はどうやらライアー自身に向けてのものらしかった。

その声は言っていた。

「出てこい悪魔！」

とっくと出てこい！

よくも僕の両親を殺してくれたな！

よくもこの樂園を地獄に変えてくれたな！

本当にお前は最低な奴だよ、悪魔！

僕はお前が誰かなんて知らないし、知る必要性もない！
何故ならお前は僕が殺し、それに伴って僕も死ぬからだ！

さあ、来られるものなら来てみる！

僕自身を道連れにしても、本気でお前を焼き殺して、お前を本当の地獄に送り込んでやる！

喜べ、悪魔！

お前の帰るべき場所、有るべき場所の地獄へと、この僕 神木天津が直々に送り返してやるんだからな！」

それを聞いたライターはと言うと、

「（威勢こそ良いが、随分と自信過剰な餓鬼が居たものだな…。」

まあ良い。

その台詞、そのままそっくり返してやるっ…。

…楠木雅子の前に、お前を喰い殺して、お前を地獄に陥れてやるぞ、青二才めが…（）」

ライアーは分裂し、無数の蠅に姿を変えると、青二才・神木天津の探索を開始した。

03:29 (後書き)

今更だけど雅子が見てたOVAのタイトルが判った方って何人いる
だろう。

04:17 (前書き)

ちなみに楠木つて名字は外道戦術が有名な鎌倉から南北朝辺りに実在した英雄、楠木正成がネタ元。

前回終盤と同時刻・屋外・雅子

雅子は屋外でライターを焼き殺すための「燃料」と「火種」を探していた。

「んー…燃料は乗用車用ガソリンで決まりなんだけどなあ…」

そう。

今の彼女に足りないもの。

それは火種であった。

読者諸君の中には存じ上げている方も多いと思うが、一応書いておこうと思う。

最も有名な化石燃料として名高きガソリンとは、揮発性が強く非常に発火しやすい液体燃料である。

原油の蒸留作業の際に上層へと溜まっていく様に、蒸発しやすい燃料なのである。

動画配信サイトやバラエティ番組で、火達磨になっている人物の映像などを良く見るはしばしば有るが、大体はこのガソリンの性質を見誤って事故へと発展したり、逆にその性質をわざと利用して無茶をしている場合が殆どである。

ガソリンの一部の成分は30 前後で爆発的に気化していく。これが火の気の類を微塵にでも拾えば即炎上の大爆発。

炎天下等気温の高い場所で草刈りや庭木の手入れをした後始末する場合や、戦死者を簡単な火葬で葬る場合にガソリンを撒いて焼こうとすると己まで火の海の中に居ることになり、大変危険である。絶対に真似しないように。

化学にも精通していた雅子は、乗用車用ガソリンのこういつた性質を熟知していた。

更には偶然ライターも見付けたわけで、準備は万端かに思えた。が、それでも問題があったのである。

まず第一に、今回の戦いでは当然死を覚悟の上で戦っている。

だから自分が焼け死のうが爆死しようが構わないが、その代わりとしてライターを確実に仕留めなくては成らない。

ガソリンを撒き、十分蒸発したところでライターに火を付け、隙有らばそれをライター目掛けて投げる。

この作戦こそ、まさに雅子が決行しようとしていた策であった。

しかし考えを巡らせると、どうにもこの作戦には致命的な弱点がある事に気付いたのである。

その弱点とはずばり、ライターには十分逃げられる隙があるという事である。

燃烧の早いガソリンとはいえ、燃え上がる最初の場所はそこそ離れた位置に居る雅子である（ライター投擲は確実にないので計算外とする）。

仮にに炎が直ぐに燃え移る距離でも、ライターならば直ぐに逃げ出してしまっだろう。

かと言って接近すれば点火直前に殺されてしまうので、どっちにする野放し確定である。

これではいけない。

そう思った雅子は、もっと適切な火種を探していた。

ライターを効率良く焼き払う為に、まき散らされたガソリンへと理想的な点火をする火種を。

例えるなら遠距離で炸裂する手榴弾のようなものを。

300円エアガンの特殊弾丸はあれ一発が最初で最後である。

何か無いかー何か無いかと呟きながら辺りを見渡す雅子。

そして彼女は売店の片隅にあるものを見付けた。

それはカプセルトイ自販機 俗に「ガシャポン」等と呼ばれるものだった。

雅子はその中に入った、カプセルトイとして子供に渡すにはかなり危険な代物に目を付けた。

幸い中身はまだ有り余っている。

ガン！

ガン！

ガバキツ！

液体窒素が入っていたボトルで商品の入っているスペースを叩き壊し、中の物を出す。

そしてそれらのカプセルを慎重に踏んで空ける。

中から効率の良い物を数个選び抜き、ポケットに仕舞う。

更に全てのカプセルに共通で入っている「ある物」を全て一つのカプセルに纏め上げ、これもポケットに仕舞う。

「おkおk。

これでライターを焼き払えるね。

こんな危ないモン取り扱ってるホテルもどろろかと思っけど、まあ良いよね」

同時刻・ホテル内部・ライター

「この程度か…神木天津…。
お前の覚悟とは…この程度か…？」

青い人影のような姿を取るライアーは、真っ二つに切り裂かれた天津の死体を見ながら嘲笑した。

何故このような結果となったのか？

天津はライアーと遭遇後、ガソリンを浴びてライアーに突撃。己も
るともライアーを抹殺しようとしていた筈だ。

それが何故、これほど悲惨な事態へと発展してしまったのだろうか？

その真相は、これから語る事にしよう。

数十分前・サウスウィング三階・天津、ライアー

天津は喉が潰れるほどの大声で叫びながら、ライアーを探していた。

「悪魔ー！殺してやるー！

出てこいー！」

そして歩いている最中、足が何かに填った。

ズボツ！

「！？」

見れば床の一部が粘土かスライムの様に凹み、その中に天津の両足がめり込んでいた。

「何だ…コレは…？」

そんな…こんな馬鹿げたことがあるか…有るか…」

呟きながら足を引き抜こうとするが、藻掻けば藻掻くほど足は沈んでいく。

まるで底なし沼のように、徐々に、徐々に沈んでいく。

そして

次の瞬間

「こんな事が…こんな絵空事みたいに馬鹿げているとしか言いようの無い事が…こんな事…有るわけが…。。。。」

無いイイイイイイイイ!!」

ズブルルルルルルルルルル!!

天津は絶叫と共に、みるみるうちに床へと吸い込まれていく。

そして天津は、直ぐ下の二階天井から吐き出された。

ズボユ…

ドサツ！

「だあつ！

っはあ…はあ…はあ…ら…ライター…ライターは…！？」

堕ちた衝撃で足を捻挫し動けなくなった天津。

ライターを落とし、必死に辺りを探し回る。

「あ…有ったッ！

だが…ガソツ…ガソリン…ガソリン…ッ！

よし…どうにか取ったぞ…これであとは悪魔がくるのを待つだけ…」

そう安堵した天津だったが、悲劇はまだ終わっていないかった。

「…ああ…あとは…悪魔が来る…いや呼べば…ぐアッ痛ッ！」

ライターを持っていた左手に激痛が走り、急いで手を押さえる。

そして恐る恐る天井を見上げるが、そこには何も無い…かと思いきや、

ニユウン…

天井の表面が少しずつ歪んでいき、浮き上がってきたのは、青白く丸い、目口のような黒い穴だけが開いた人面のような物。

しかも一つではない。

徐々に…徐々に…ゆっつっくりと…それらは無数に浮かび上がっていく。

そして無数の青白いものと、中央に出てきた深紅のものを含め円形に集結した人面達は、視線を天津に集中させる。

「…うああああああ！見るな！僕に視線を向けるな！

やめろおおおおお！！」

恐怖の余り騒ぎ立てる天津。

すると、中央に座す深紅の人面が注意する。

「 B e s i l e n t .

（訳：静かにしろ。）」

深紅の人面が発するオーラに威圧され、静かに黙り込み、その場で仰向けになつてしまふ天津。

その意識は、徐々に薄れていこうとしていた。

そして深紅の人面は何やら指揮を執り…

「 1 , 2 … 1 , 2 , 3 , 4 … 」

合図の直後、人面達は歌い出した。

その歌声は、さながら世界最高峰の合唱団が歌うほどに美しく、また楽器演奏の音を担当している者も居るのだろう。

オーケストラの美しい音楽まで聞こえてきた。

天津は起きあがることが出来ず、意識を取り戻してもその歌を聴き続けた。

美しい歌が始まった。

美しく不気味な歌が、始まった。

『死に行く悪人への賛美』

歌：偽りの仮面合唱団

演奏：偽りの無人オーケストラ

総合指揮：生きている嘘

God

(おお神よ)

We are sinful people .

(我らは罪深き者)

Please it is saving result
food

(どうか我らを救い賜え)

God

(おお神よ)

We are weak people .

(我らは軟弱な者)

Please it is defense result
food

(どうか我らを守り賜え)

The abhorrence of one kills
th

e person .

(一の憎悪が 人を殺す)

The malice of ten destroys the
home .

(十の悪意が 家庭を崩す)

The murderous intent of 100 burns
out the town .

(百の殺意が 街を焼き払う)

The pain of 1000 sinks the
country in the sea .

(千の苦痛が 国を海へ沈める)

The wickedness of the myriad
steps destroying the star .

(万の邪悪が 星を滅ぼし続ける)

The person who has evil is
gone though he or she often
hears .

(悪を持つ者よよく聞くがいい)

You see despair sooner or
later .

(お前はいずれ絶望を見る)

The person who has evil must
tell oneself .

(悪を持つ者よ覚悟を決めよ)

You crawl the hell some time
and turn .

(お前は何時か地獄を這い回る)

The callyx of the person who
has evil is good as far as
possible .

長身で肩幅が広く、体つきは筋骨隆々。

身に纏うのはビニール製の白く裾の長いエプロンだけ。

右手に持つのは身の丈ほども有りそうな大きな斧。

皮膚はなく、むき出しになった筋肉や血管。

頭はなく、そこには蔓のような血管の束から伸びた大小無数の目玉があるだけ。

そんな大男が、天津ににじり寄ってきていた。

「ヤ……………メ……………テ……………ク……………
レ……………ッッ」

恐怖から全力で叫びすぎた天津のその声は掠れており、命の気配すら感じさせないほど弱々しかった。

大男の斧が、遂に天津へと振り下ろされる。

殺される瞬間、天津は呟いた。

「平……和……を バギユゴガアツ！」

頭から汚く真つ二つに叩き割られた天津。

変身を解きつつ、天津をあざ笑うライアー。

それから暫くして、今に至るわけである。

現在・サウスウイング2階・ライアー

ライアーは人間なんて下らないだけでおもしろみも何も無い只の餌

だと思いこんでいたが、雅子に対する考えだけは違った。

雅子は気高く、勇敢で、正義感の強い人間だ。
そしてライアーは思った。

「（そんな人類に対して、嘘を吐くとは勿体ない。
折角至高の人類なんだ。ただ普通に殺してしまっても面白くは代
らう…）」

折角の上玉だ。

そこでライアーは、雅子と戦うに当たって自分なりのハンデを儲けることにした。

そのハンデとはずばり、

「変身禁止」

但し、身体の一部を刃物や鈍器にする程度なら許容範囲内。

これはライアーが突如「楠木雅子とはマトモに戦いたい」「変身無しで何処まで行けるのか」という理由の元、一瞬で決まったものである。

ライアーは今、暗闇の中を走り出した。

唯一餌でなく宿敵と認めた人間 楠木雅子を探し出すために。

一方の雅子も、ライアーを探しにホテルへと向かっていた。
出来れば此方から先に見付けなくては。

決戦は遂に始まった。

この壮絶な戦いを回避できる屋根など、あんまり無い！

04:17 (後書き)

あと雅子って名前は中学時代結構世話になった上に中三の頃は担任としても結構必死に世話してくれた適度に美人で若作りネタが自慢の中年英語教師がネタ元。

05:03 (前書き)

暴虐の限りを尽くしたライアーの最期は、
以外に呆気ないです。

「楠木雅子。」

俺が見るに、お前はとても優秀で面白い人間だ。

私は今の今まで、人間なんぞ餌か玩具程度にしか見ていなかったが、お前だけは別格だ。

素晴らしい奴だよ、お前は。

本当に最高だ

だからこそ、私はお前に敬意を払う」

「敬意？」

「そう…敬意だ。」

今までの人間はどいつもこいつも喰い殺したり罵る気持ちで卑怯な手を使って殺していたが…お前は…お前だけは…真つ当な勝負の末に殺してやるっ」

「真つ当な勝負…？」

「そう…真つ当な勝負だ…」。

それにはまともな武器が必要だが…手持ちはあるか？
無ければ取ってこよう」

「武器…？」

なら有るけど。

ほら、自作したヤスリ刀」

雅子は鞆から鞘に入ったヤスリ刃物を取り出す。

細長く、鋭く、頑丈なそれは、忍者刀のような輝きを発していた。

「そっか…ならば良かろう…」。

ではルールを説明する。

一に、一戦15分間。

お互い手持ちの刃物のみで戦い、人間はこれを取り替えても良しとする。

二に、生体兵器は能力を制限する。

肉体再構築及び片腕を刃物にする以外の変身行為は全面的に禁止。
基本形態は人間のものとする。

三に、戦闘時間終了に関して。

戦闘時間が終了した場合、そこから20分間の休憩とする。休憩時

間中に相手を攻撃した者は、自殺しなくてはならない。

四に、人間の自由について。

人間が生体兵器を殺す為に用いる道具・方法は、制限されない。但し、休憩時間中の襲撃は別とする。

以上だ…」

「案外簡単なのね…で、戦闘開始は…？」

「お前の意志で決めろ…」

「了解…じゃ、初め！」

開始宣言と共に、ホテルの奥へと逃げていく雅子。

「…つくづく面白い奴め…！」

それを追いかけるライアーの表情は、他のどんな時よりも楽しそうだった。

サウスウイング二階・雅子、ライアー

「…よし…取り敢えず此処にガソリンを

「待てエ！楠木雅子オ！」

「き、来たあ！」

…く、こうなつたら応戦するしか無いね…」

雅子はヤスリ刀を鞘から抜き、ライアーに斬り掛かる。

しかしライアーは雅子のヤスリ刀を、刃状に変化した自らの右腕で受け止める。

ガギイン！

「流まじツ石ア…！」

「お前も……なアツ！」

ギヤイン！

鏝迫り合いに勝ち、雅子を突き飛ばすライアー！

ドサツ！

「く…」

雅子はどうにか起き上がり、鞆の中から直径5cm程の球体を3つ取り出すと、それをライアー目掛けて投げつける。

ヒュン！ヒュヒュン！

しかし球体は面白いようにライアーを逸れていき、ライアーの直ぐ後ろで碎け、緑色の液体を撒き散らした。

ライアーは動かぬ雅子に近寄りながら、言った。

「…中身は何だ…？」

「一見すると毒か酸のようだが…」

すると雅子は落ち着いた様子で答えた。

「…ご想像にお任せするよ…」

「そうか…」

そして、座り込んだままの雅子に歩み寄るライアーが、ついに雅子の眼前へと近付いた。

と、次の瞬間。

「…ぬんッ！」

タンッ！

雅子は突如その場から垂直に跳ね上がると、右腕を握り後ろに引いて力を溜める。

「！！！？？」

「ッラア！」

ドグワシ！

ライアーの胸の中央にストレートをたたき込む。

「ぐオッ？」

ドアッ…ベチャ！

吹き飛んだライアーは、床に仰向けに倒れてしまふ。
賺さず起きあがることするが…

「…！？？」

なんだ…コレは!?
背中が張り付いて…動けんツ!!」

ライターは丁度あの緑色の液体が撒かれた場所に倒れていた。
雅子はその真相を語る。

「超強力粘着液。

とは言っても、ペイント薄め液で剥がした鼠取りマットの粘着液に、その他色々混ぜモノをして緑色に着色しただけの液体だけどね。でも粘着力は確かな訳よ。

何たって、ワイヤーを繋いだベニヤ板と重さ数百キロの鉄骨をそいつでくつつけて、ベニヤ板をクレーン車で引っ張り上げたら相当な高さまで墮ちなかつたからね。

クレーン車担当の後藤さんには本当感謝だよ」

そしていざ束縛されたライターへとガソリンを撒こうとした時であった。

雅子は廊下に何かを見付けた。

「んお?

このポリタンク…は…?

………この臭い…間違いない!

何故かこんな所に大量のガソリンがある!」

そう。

ライターの化けた「偽りの仮面合唱団」が歌を歌い終わった時、恐怖の余り逃げ出した天津は、ガソリンとライターを落としていたのだ。

「ほんじゃま…そう言うことで…。
ほんの僅かな間だったけどさ…楽しかったよ」

雅子は貼り付いていて動けないライターに、最高の笑顔を贈った。
それに対しライターは、

「…此方こそな…。」

人の手で作られた、本来あり得てはならない存在であろう私を、こ
うも呆気なく倒せてしまってお前は…間違いなく最高の人間だ。

…生きる…雅子…」

「最高…ね。」

余る言葉をどうも有り難う。

そんじゃ、かけるから」

頷くライター。

雅子はライターに、追悼の意味も込めてガソリンを注ぎ始めた。

数分後・同位置・雅子、ライター

雅子はライターと20mほど離れた位置にいた。

「準備完了…っつと。」

あとは…点火だけだね…」

そう言うって雅子を取り出したのは、長さ8・5cm程の小さなミサ

イルのような玩具。

先端は金属製、後ろの羽はピンクのクリアパーツで出来ており、中間部位にはバネがついている。

ここにカネキヤップ 音だけの鳴る玩具銃に付属する弾薬 を装填。投げつけて硬いものに衝突させるなど、先端の金属部位が衝撃を受けると、中の火薬が炸裂。

大きさに似合わずそこそこの爆音と共に、火花を散らす。

実際のルスツリゾートでは確認できていないが、実在するカプセルトイである。

少しの火花や静電気すらも火種として大爆発を起こす乗用車用ガソリンならば、これでライターを焼き払うことも可能だろう。念のため、ストックも用意してある。

「んじゃね。」

さよなら。ライター…。

さよなら。正直な嘘吐き君。

さよなら…さよなら…さよなら…」

雅子は玩具のミサイルにカネキャップを装填し、それをライアーの居る位置目掛けて投げつける。
うまくいけば爆発するだろう。

うまくいかなければ、ストックを投げればいいし、それが尽きても自分が道連れになってやれば良いだけなのだ。
ライアーの言葉には反する事になってしまいが。

雅子は力を振り絞り、ライアーの居る位置目掛けて玩具ミサイルを投げると同時に、急いで三階への自室へと向かう。

そして雅子が自室の鍵を開けて中に入ったとき、

バァン！

ドゴオオオオオオオン！

ゴオオアアアアアッ！

カネキャップの小さな爆発が、ガソリンの大爆発を招き、サウスウイング二階廊下の一部を焼き払う。

荷物をまとめ上げた雅子は、ルスツリゾートを一目散に逃げ出した。

外の駐車場には、自衛隊のようなカラーリングのジープが1代と、トラックが何台か留まっていた。

中から降りてきた細身の男は、雅子を見てこう言った。

「楠木雅子様。この度は大変お疲れ様でした。

お初にお目にかかります。

私、株式会社シンバラの緊急特務科副長補佐官の木伏斑と申します」
メタ発言とも取れる台詞をいきなり吐く男に、混乱する雅子。

「何で…私の名前を…？」

それに…緊急特務科って、陽一さんの居た？」

すると男は、優しい笑顔で答えた。

「はい。私は緊急特務科で安藤副長のお手伝いをさせて頂いていた者です。

詳しいことは車の中でお話し致しましょう」

「お願いします」

雅子が斑から聞いた話では、何でも緊急特務科の者は身体に小型の録音機械が埋め込まれており、本人が死亡すると（または一定の間隔で）機関員周辺の音声情報を本部のコンピュータに送信するのだという。

斑が雅子の名前を知っていたのはこういうわけだったのだ。

更に、陽一はライアープロジェクトを大変支持していた男であり、今回の仕事はかなり危険だから部下を危険に晒すわけには行かぬという理由で、単身ルスツに出向いていたとのことだった。

「そうですか」

斑は語り出した。

「ライアーは…歴代緊急特務科の三強肉体派と呼ばれた百戦錬磨の安藤副長すらやられてしまうほどに恐ろしい相手でした…。

だから…あの場で果たして誰がライアーを止められるのか…私は不安で不安で仕方なかったんです…。

雅子さん…いえ、楠木様。

我々の失敗の尻拭いをして頂いて…本当に…本当に…有り難う御座いました…」

涙を流しながら礼を言う斑。

「泣かないで…泣かないで下さい、木伏さん」

そう言つて木伏を慰め、車の外に目をやる雅子。

東天。

既に夜は明けていた。

青い空と、紫の雲。

美しい朝日が、上っていた。

05:03 (後書き)

禿狗禄の頃は本編に限り一話平均40000〜60000文字だったよな…。

XY・ZN(前書き)

もはやホラーなんかじゃありません。普通の後日談です。

数日後の夏コミ初日・東京ビッグサイト・雅子、？

今日は夏コミ初日。

同人即売所には「う　れ　もの」のコスプレをした男と女がそれぞれ2人、飯を食いながら、時々来る客の相手をしていた。

女の方はコンビニで買った具沢山のサンドイッチを片手に、携帯電話のRPGに没頭している。

男の方はインスタントの焼き蕎麦を食いながら、ハダカ新聞を片手にあぐらを掻いてくつろいでいた。

「いやー…手塚先輩。

毎年の事ながら付き合ってくれてどうも有り難う御座います」

女の方。とは勿論、我らが主人公・楠木雅子の事である。

頭にケモミミを着け、腰に獣の尻尾を着け、赤白で構成されたアイヌ民族風の衣装を着込み「た　れ」の正ヒロイン・エル　ウに扮する雅子は、隣にいる仲良しの先輩に向かって礼を言った。

「良いつて事よ…俺とお前の仲だろうが…」

ところでよお…雅ア…。

確かお前何日か前にルスツリゾート行つてたよな…？」

顔には角の生えた風変わりな白い仮面を付け、青・城・黒という涼しげなカラーリングで袖と裾の長い独特な衣装を着込み、頭にロン毛のツラ、右手に長めの鉄扇を持った長身の男「う　わ」の主人公・ハク　口に扮し、後輩である雅子にそんな疑問を投げかける

のは、裏でUMA・禿げ狗として名を馳せる異形ゲーム誌記者・手塚松葉。

「事件の事ですか…？」

「やっぱりアレニュースになってたんだ…」

データを保存し、RPGを中断する雅子。

「ルスツの事件よ…日本異形連盟ニチイレで結構ネタになってたぞ…」。

「ついでに聞くが…昨日日異連の新参名簿にお前の名が有ったんだがよ…どういう事だ？」

日異連：正式名を日本異形連盟と言い、異形 人や獣の姿をしているが、老いとも病とも縁がなく、それぞれが人知を超越した様々な能力を持つ種 を保護するNGOである。

また、シンバラ社とも友好関係にあり、緊急特務科の機関員は全てが異形か、異形について知っている者であったりもする。

「あー…そーいや報告忘れてましたね。」

「どういえば良いかな…」

「何っか入ってきた奴ガソリンで焼き殺したんですけどね、帰りの車ん仲で突然ブラジャーきつくなりまして」

「…異形化とテメエのその美乳が膨らんだのになんの繋がりが…」

「で、不安になって 大の付属病院で診て貰ったら、先輩の話でしか聞いたことのない診察室を紹介されました」

「…異形専門総合科：通称『フリーク・ホスピタル』か…」

「で、血とか髪の毛とか色々調べて頂いた後で診察結果頂いたら「見事異形化してたと…」」

「はい。胸が膨らんだのはその反動だとかで」

「んーで、何の異形だったんだ…？」

「はい。『変化』の異形だそうです」

「変化エ？」

「何でも、色々な固体に変身したり、液化や気化も出来る能力らしいですよ」

「成る程な……そりゃご苦労なことて。

ようこそ。異形の世界へ。

日異連東京チーム一員として歓迎するぜ……ま、お前の所属は岡山チームだろうけどな」

「でしょうね。宜しく願います」

と、其処へ新たに客が現れる。

此方もコスプレイヤーのようだ。

ヨーロッパ系であろうか、細身の美青年で、此方は全体的にシンプルな着こなしをしており、メインキャラの「オロ」に扮している。

「あのーすいません。

この『栗栗栗』って本、1〜6まで全巻頂けますか？」

「あ、はい畏まりました。

それでは……えーいとオ……お会計が500円5点に700円が1点で3200円になります」

「あ、3200円ですね。

はい。これで丁度」

雅子に千円札三枚と百円玉二枚を渡す男。

「丁度お預かりします。お買い上げ大変有り難う御座います。

これからどうぞ『HELL・S PARADISE』を宜しくお願います」

「此方こそ。同人活動頑張ってください。期待してます」

と、ここで松葉が口を挟む。

「いやあ〜それはそうと、お兄さんよくお似合いですね〜。

お国はどちらで?」

「イタリアです」

「イタリア!」

はあ〜イタリアねえ。

イタリアの家庭料理と言えば、ボルシチでしたっけ?」

「そうですね。」

ところでその声…失礼ですけど、仮面とって貰って宜しいですか?」
松葉が仮面を取ると、男は驚きのあまり口を手で覆う。

「手塚さん!手塚松葉さんじゃありませんか!」

「ほう、この手塚をご存じで?」

「当然ですよ!貴方の本は全部持ってますし、ブログやホームページもなるべく毎日診てます!」

『たれも〜散ゆく者の子 歌プレイ日誌』読みましたよ〜!

貴方が手掛けた公式ノベライズ版『The stated one
〜白き皇帝の生涯』も全巻読ませて頂きました〜もうマジ泣きですよ〜!」

目を爛々と輝かせながら、イタリアンの青年は語る。

こうしてまた、夏は過ぎていく。

XY:ZN (後書き)

本当は禿狗禄の時みたいの色々語り尽くしたい事とか有るんですが、面倒なんで省きます。

あと手塚松葉って誰だよって方は禿狗禄を読んで下さい。

大変貴重な時間を割いてここまで読んで下さった親切な方々が、どうか未永く幸せでありますように。

2009 / 8 / 14 / 4 : 09 蠱毒成長中

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6933h/>

ザ・ライター

2011年8月12日08時05分発行